

「糸が絡まっちゃう」。歓声をあげながらたご揚げをする子どもたち＝5月8日、宮城県気仙沼市の気仙沼小学校、竹花徹朗撮影



聞き書き@京都

大震災で両親と生き別れた孤児は140人を超え、なお大勢の子どもたちが避難所生活を続けている。そんな子たちへおもちゃを送ろうと、宇治市で障害児施設を運営する亀口公一さん(61)は取り組んできた。子どもにとって、遊びは生きるための力だからだ。

遊びは子どもへの栄養

東日本大震災

全国の仲間へ声かけ

—なぜ、被災した子どもたちにおもちゃを。

震災が起き、まず頭に浮かんだのは、子どもたちを支援しなければということ。子どもは自分に必要なニーズを理解し、表

9 被災児におもちゃを届けた



かめぐち・こういち 京都教育大を卒業後、障害者通所施設に勤務。2007年、NPO法人「アジュール舎」(宇治市)を結成して会長に。発達につまずきを抱える子どもたちの施設「ころぼっくるの家」を運営。

障害児施設運営

亀口公一さん(61)

現することが上手ではないからです。だから、大人がそれに気づかないと、子どもへの支援は後回しになってしまいます。赤ちゃんにミルクが必要なように、子どもには遊びや自由な空間が欠かせません。いわば、子どもが元気に成長するための

栄養ですね。それがなくなってしまうことは、子どもの発達にとって大切な時間が奪われることを意味します。直接、現地に「遊び」は届けられないけれど、おもちゃに託せる。そこで3月いっぱい、全国の仲間たちに呼びかけました。ぬいぐるみにミニカー、木の玩具、カードゲーム……。募集を始めてみると、子ども自身から「何かしたい」という問い合わせが相次ぎました。

海外の子からも支援

—子どもたちからというのは驚きですね。ええ。京都だけでなく、大阪や東京、さらには海外からもロシアの子どもたちは、ウラジオストクの日本総領事館までバ

スで2時間以上かけて、おもちゃを持ってきてくれたそうです。タイの子どもたちも、おもちゃ代にと義援金を送ってくれました。子どもたちは、いま何が必要かを直感的に感じとったのかも知れません。最終的には、数千点のおもちゃが集まりました。幅広い年齢層の子どもたちが一緒になって遊べるよう、いろんな種類を箱に詰め、岩手県や被災地のボランティア団体に送りました。

—今後の支援は。

これを機会に被災地とつながり、新たな連携ができないかと思っています。

今回の大震災は原発事故による放射能の問題もあり、長いスパンでの支援が必要です。国も、「こども省」など担当部署を設けるくらいの取り組みが必要ではないでしょうか。

時間が経つにつれ、たまったストレスも次第に表に出てきます。対症療法も必要ではありませんが、子どもへの本質的な支援がより重要になってくるでしょう。

震災前の姿に戻すだけでなく、子どもたちにとって、本当の意味で十分な保育や教育が生まれてほしい。そのための支援を息長く続けていきたいです。

(聞き手・西江拓矢)